

あつよき年鳴海北邊の沖津波と
とみし里八仁をよしとんまむし
とさ直小翁こんれく名く多親なりと
裸おの号をとりあ風雅此あまふ人
一奇此ま行り才神家西名ち方史
我の餘あつり注本此強客あふ尔

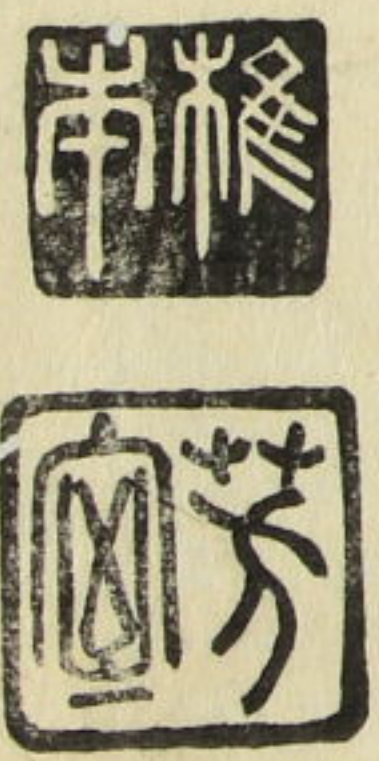
二巻の序



數日山名をたづねてハねし 左筆のを
相續れどもちうくハねハ棚ハ花ハ
しし月ノあはれハちウハたせ遠々
然ヤ一花ハ坐しはあふ物化去
高江ゆんまろく風和故人と故ハ
情む望し孝子飛世ハくニそ
兼をもて祀社ノ道をけふてたき

くし一筆進福の一筆を催し予ハ
は席をくしを志のつらきを志業
し昔ハ漢佛乗の因キ日月ノ
二ニ此語を志るはものなりし

信老 甘千叟

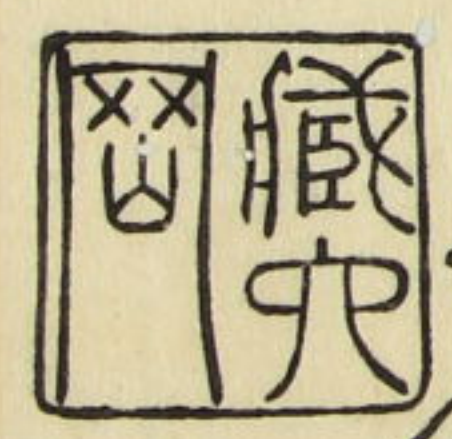


自序

習々軒情の往しつゝおぼく申
 乃二日暨之の事とさすもに果下此
 客さう然るまは固くこころの
 英士御友とさすに志をなして
 芳次と福よきくに止ちん
 一集ありあつて書きたるは借よ

一おの旅志を吟みよめく一お馬と
 たりぬ律中一法席と撰はさるる
 およその二進進よよらねもあつたり
 罪宥有然とせんかこふ云
 惟時安んばしの事なるの成よ
 やする中秋の日 ともいふ

希世世書
 希世世書



祿免ハ松風の里ハひつた

吾輩的くくらおさちのき

拙平ハ降日
を白紙

ほ〜さふれ園はみよや

啼あり

此一軸其母の秘藏の一物なり
むうを今の善物より物も是等
勿地吉れを今あるより一物
又思ひ初来未身其竹斎の吟録を

五帝仙の一黄少一々善翁岩髓の
御徳の事申す様御つひく前考
み中何様と為奇異別作善の奇
あり各の日記の

このうもれを

親し似ぬ男をさるじの類志の終

亀世

入相の安こころゆしとあらた

蝶羽子 和角

筆とくし能朽くさ物事のあらじ

同 鍋盛

其のうもれ今とれはは母とあらけ

同 和陶

枝をさくく善山一きくあり樹下

同 鈴波

せめくこのもれ所 臨ゆれし

同 女 さま

ちるやぬけさハこうこのうもれを

同 姉さ

10 ちるやるふこころねひのちと見え

同 三保

ちる花ちる花の柳やあらり神

同 要宿

姉り神のありありのあめさるれ

同 庄米

このありの火もさくくやけのうも

同 庄米

孫のうもれとせさるれ

同 庄米

一音梅のく洞千一ひちしん

同子 和貞

須一の字舞もちもなま

同 麥輔

杖折く結成く松や東の音

和信

後の旅はのそ 社もみれふ

廣應

行しんも 寄ふまきりし 音の梅

和斟

20

八極秘や 一音のこゑの須きよめ

神主 壽盈

追悼

浦ちより 杓極よまはるも

銀濤

月花のし月の留よか 神志え

白之

竹半一もちのうまをた 枯地家

才徳

向半一乃 糠千 釘きり 音の城

和水

三のふさりと 今 鈴音の 崎

正波

暖めを けし 崎 音 神の音

桃燕

情や け 音と 鈴 音 乃 音の人

和秋

折く折情をうたふる柳下 文選
 携ちまきく記念中鳴る北をとり 冬輔
 三つり田より友をひく指書
 せしも今身よめをこゆり

30 観よれそひよりそなり折る也 不貼
 人もおちやみも牡丹を吹雪の如 有松 中三
 系解と梅も冬の柳しうぬ 羽笛
 啼ねり入や福免の浦ちり 南野 單樂

嘆や散るものうらむ 高の如 大高 律哥
 今世よりつらうふみや四の旅 孤松上苑 池塘
 ちのりよまきや免ちり筆一の雲 僧 竹龍
 己う念の何よりちうらもや水仙花 山崎隱僧 快歌

神也
 子七首 向ふめくる古作 元 銀濤
 ちのりよまき 柳やも向のそれ前より 冬輔
 40 ちのり 折く春の 擡とうらえしこ 花燕

流月土子の夜柳の本志

冨岳のありさうく

星の光のひびくうー切らる

香煙の流の跡のふり

枝のささるを具にけり

うらみ子の柳を種にけり

山岡のふかうはる月

浩然の氣のそりなり水

龜世

鍋盛

和陶

冬輔

和侍

鈴波

ウ

市の中をまわぬ新を蒲山流

四つ管のあはれぬ弟の悪

露の雲もあはれぬ藍の伊達さうり

50

かたはらにまゝなる徳帽の流

道なきく泥のとり車

唄の柳子にけり

思月まのひの浦の平屋流

二十一社と草のさる

文選

龜世

鈴波

久延

鍋盛

和陶

冬輔

和侍

先おけり 杖下 是る神と走り来 和陶

青い 子戸の人をれ 次し 後波

花待もいそ神と 暮代 経ひあ 文選

春風 拂ふ さら 冬輔

され 此 浮縁の 念佛よ 小船 無世

60 世話を 磨く 相口 味陶

茶を 呼も 樹神の 是れ 長席下 鈴波

まゝ 平飯うち 出る 魚の 魚世

子規 けを 瓜 煮く 味佳

色紙 湯中 小舟 鍋盛

或時 是 酒を 志す 冬輔

平の 庭を 押風 和佳

盃の 月を 子代の 鍋盛

更さ 志す 冬輔 久選

別る 是は 別 浅き 亀世

70 志す 紙の 鑲ふ 和陶

ウ
雪の跡を焼く二階の夕きり
文彦

空声なくく甘みよ
粥
鍋盛

神も髪と兼露も包む狐泣り
和信

汗も地を走り井の卒
冬輔

け花を切るもまじり
木の思
鈴波

道草し
草の穂を摘
執筆

雪降りゆくまきのほろの音も
別の上をくまをたか
詠みひも弟のうを
くはるやこそ
信と信を
根の千一登り
信り

夕晴や
雲も
阿
眠
山
亀世

梅や
夕
雲
水
鈴波

もろ
水
関
水
鍋盛

80
和信
和信

三十一の多峰もいよいよ細根の
乃ちうくあふくたれを

君去くも後細根の年一本並 亀世

竹のうはれは流るよりの名 鍋登

年とともにおくもや恩の日の名 和陶

齒牙のく寄けの灯や靈むえ 和貞

地くもやあふ靈むえ除束の名 鈴波

追悼

尾府

世とたのむるおけりもい乃めく

けりあつあけりもい乃めく

い川もけむうもみを縁のうす氷 野有

太風私を人れ牌あまをる

蟬おのり乃辞せり信終

白念をるを感と

ふん三門さるやあけり 雪舞 丁牧

鍊兵堂

影下郷氏何基蝶羽追善其固器

彼の世に絲瓜乃片杖 時多の那

月空居士
露川

付よく宗れ連候や冬牡丹

白浩

90 時多のまもぬれ次樂あや 後の縁

可考

風和翁の卒を悼む

水晶のあやうり 拙考を佛

三林

傍るもあはれ悲し 冬牡丹

五夕

挽詞

下郷氏の何く 蝶羽をくちの蕉門
乃ら川かまの御よ古稀のまひ
まさすくけを方酒りや中は終
しる名あし 吟海山は地階の一城
をか海く武洛平一人とあはれけり
よりあし 一そ文ちりきり 念是子其
故翁の在世に 捧ひく千多然の撰
考よ世の名を歌し 一そまよ 鈴波の
あし 一そ年いすこ 差りれも 文程の
箕巻 吟和 一そ子あはれハ 寂平 一三
世の風神を 傳ふれり 母よ 方く けり

善き人なりきりて
まゝに

竹よつと終りの星や
及喬舎
巴雀

追悼

神よ海く阪の移志志くれ
十又

神よやをましきぬ時
女
紫業

月入く付もたし
木兔亭
可笑

吟續よ鳴やきりれ
釣雪

習志野宗風居士氏ハ下郷字ハ
子善翁也ハ多葉のむし
御修志翁のまに
七旬平一ちりま齡あり
遠傳の楽山子と
よいさなりれ
まの今や二十年の
孝子孫世も
二十外此身に
見れ
の先雅身
あや

中ノ音の一幸あらん

二十のむしよ豆花 生等堂

あふ僧 曲腕

100 音のこころ其海

音樂乃口占

夫よ女 菊名

い女 紫園

義毛吹

木々白諸交

こ蘆中

合山夏

世韻志

於支斗

110 音吹雀

子花雀

ね亀帆

たもとく人ぬまはけし淋しきまはけ 急才
とありよるまの白さとあけし時と 浪夕
足跡のあつとこころみとあまの物 有八
こころのいふや神のあがりなり 僧 凹凸
拾ふのそまきとけりせやあまの文 浮州

追悼

あやとせりしきこころぬまへ神志れ 文陸

追悼

熱田

花もものあつちなる世も六十五歳
えはくし中ちし半れはたしあ
あつちと野の山の雪の清さをあひ
春をも待たし彼國の旅のつらさ
あつちの風和さ人の
名をたれし

あつちの風和さ人の

あつちの風和さ人の

明星菴 辨三

鶴羽

追悼

塙羽子ハ付母の傍にありて
月とこのふゆのやまを云隠れぬ
こゝ齡も彼交命の何よりふと
こゝ一ひの雛葉更なれハあや
ういふものおけ付せ

鶴羽城

化光

阿久志しとくをさるるの月

塙羽先生追悼

こゝあはれもく強しとあはれ
まことの中とあはれ

林耀室

尤見

焚香しとくをさるるの月
まことの中とあはれ

智葉

追悼

三物新城

下郷風和の霜そ代々
又屋をけりし風雅ハ
年一考は三帝とく
路を原しとく
附をあやうり

追悼

駿府

蝶羽の如く此も何よりまはし

なれどもとてはけくはうし涙も

黒霧

なきを計く通るや破ちり

雁胎

ひらひらのしほりや葉の翁

鳳枝

蝶羽居士追悼

木曾

あやうきかきちり灯のまろ

計升坊

坡氷

東武

風和追悼

130

露りしはまはあれは枯

玉榮子

鳴海蝶羽といふ人

ひらひら

かきくしあめさるう寸愛人

閑水叟

追悼

墓所の隣 雙ハ之又ホ志磨也
旧知をれそ居士の井も

枯蓬 兼く我軍一風の音 湖十

彼岸人 行又浪を以沖傳 鳩居

あつらひの果や 少法の所なり 亀及

高き草戸 芦の葉小葉人もちり 桂十

こゝ也 忌の森をんをちぬりまふ 春勝

伊はさしなをり 妙れけさの我 文十

お月のゆりれ 兼もさあ車 木髪

追悼

おそりの蟻羽子 一々をまらし
の法はたはいこくを樹の枝たのこ
ちくつおよ若あを厭歌有しをま
そま地の名ををそり何んは
よるんを

ふろあや一思ひあをそを年あ 采仲

140 軍一え一何ん建ハ清く心のみ 式池

云の如き一 雲形中を渡り 金弁

冬ちわうう 舞降沙汰乃佛の子 歩跡

とふちわうう 怪れと云の佛之乳 撰書定 沙文

追悼

鳴海の譯 蜂羽を御一人を紅人

あり 去年より中白も海より

うし 孝子の心をいんさく

一平と御くし 向うより 侍りぬ

清條の心を 寄 翠也 云 佛一 祇 巫

根を去り 疎り ありとも 枯柳 亦 筆端

追悼

鳴海の風 雙をりの 孝子

初陶子れ 知く 其ま

子とも 風の神も 志を 枯柳 文編

追悼

風和や 居六 蕉門乃 神より あり

ま 孝子の 思ひを 追ひ 其まに 神士

と 集め 正風の 後を 思ひ 其まに

わがひーうーいーまお月枯る也
の風千一後りぬかすりかのか
をたすりあてぬるすも神世の

あつらひうーいー

足跡のふり草や、高の花さへ

南凉舎
鷺舟

追悼

けー勝の二りりーうーいー
端のあま、中道りぬ

子の園と人よ、あまや、あまのり

存義

追悼

泣是む、藤見の友乃、甲あま

羽州米澤
寒令齋

150

封ー月も、乾きうーいーいー高のらた

吾舟

線香の立枝や、うーいー冬至梅

都季

鳴も、あまや、あまのりぬかすりかのか

水哉

こを、あまーいーあまおま、あまのりぬかすりかのか

花舟

水仙花さうあや、あまのりぬかすりかのか

奇英

まろりーや、あまのりぬかすりかのか

柳蟻

声何けく呼ぶあどきし片を原 丹原

奥州信走

ほく樹の香やそかきく香の捕 等舟

追悼

濃州大垣

雲より月の中の子おるほろりて

蝶羽を人の心よひく解あま一奉と 倫お

香を何と百味の和よ冬の梅 隆五

桃原下

あつりや一束の香を教るあふ 東家

芙蓉主人

花ももるワの香やあのお香佛 鳥六

蝶羽を人の心よひく解あま一奉と

菖花園

八軸の法やハの心も花の時 半慈

雲より月の日垂世の如かりたり

何れも蝶羽を人の心よひく解あま一奉と

けぬき種終りともあふるは月章子

そよりな

花ももるワの香やあのお香佛 東李

梅路舎

追悼

春のつばき柳もさかすか
久々利 海豆

あつたも追くや弘誓の帆うけ
伯夜

蝶羽交の灵位に追福
伊勢大湊

秋のつばき柳もさかすか
三喜

追悼

越後シハタ

敬事しよきまされくははるの
竹市

追悼

浴場

蝶羽の如く追悼のほろりと
ふふふをいひあくるの子孫
をなぐさあはる

終末の如く追悼のほろりと
竿秋

蝶羽交の灵位に追福

あつたも追くや弘誓の帆うけ
吳洋

蝶羽交を悼む

御射山翁

送る柳もさかすか
羅人

追悼

嗚呼老人ハ予々貞躬行跡の長と
めて是れ一徳ふと一徳の冬も
有り終ひしと中々道

程菴

松阿

170 嗚呼一徳のふりハ一徳の子ハ
志ありし神に告げ玉所也 夷三

追悼

嗚呼の嗚呼ハ久しく禁嗚秀
吟教あり 嗚呼月のおとさる
路の道ハ代念の如くハ

見よ 念れよ 嗚呼ハ

白葉泉

富鈴

追悼

嗚呼子早後其書とを
古人ハ其書のものより

九十九

風之

嗚呼や 志りとありし

嗚呼雅翁の如し 嗚呼
嗚呼いささしく 嗚呼
嗚呼いささしく 嗚呼

書林

重寛

嗚呼 教あり 嗚呼

追悼

攝府

とをくくもて富をききふりて物せし人も
世とてさうりしとを悼む

雪はたふよふもよも差の古懐
耳千史 芳室

雪ありしうぶ世の暮を吾いふ
栗山 峯唯

雪海のや志うりて陸地古の旅
陰枝齋 垂天

野々く法の名を志梅えす
九苞堂 舎風

追悼

世とて足くさうりて終や水の月
布門

追悼

永く藤く時を志ぬ故郷
富天

紫千河多る光の波乃法らうか
吉長

風を仕神の河よりや雲柜
雪川

追悼

伊丹

来くも泣歩程と梅影河下
蜂房

沖影よか松のよやく雪の風
文人

追悼

追悼

追悼

有馬

月を思ふも月やみよのちのちのち
 冬枯や名のも州も時節むじし
 霧軒
 舟をささしとわしと
 上志
 結ふも中一霧をたのめや力草
 泉山
 190 松の雪も下きりあのもゆか
 不學
 ちちんさきむうーかこのおんも
 柳哥

おもひけきやも 松さぬきうーか 可樂

追悼

播州明石

月を思ふも月やみよのちのちのち
 冬枯や名のも州も時節むじし
 霧軒
 舟をささしとわしと
 上志
 結ふも中一霧をたのめや力草
 泉山
 190 松の雪も下きりあのもゆか
 不學
 ちちんさきむうーかこのおんも
 柳哥

右列子忘機の伝本を法く

志すや哀れ夢のあやみくまに 巴岳
哀様のゆめと心叫ぶ花並の那 花江

追悼

豫州水見

きりりや折るきりり中の色 柏我

消く後初るきり 雲の屯の人 千涯

200

まゝとくく妙ちうくおれ色これ 雨律

小松言田

追悼

備中松山

尾列吟海の下郷氏悲世子史考據我翁
乃志を継ぐ追悼の句を集むるに
括弧をゆるぐとて其の句を
その人の風流を志すに

契り吾子とありその志は友あり 牛涎

花六園無母子を風雅の乃よ川に
今年初夏の比馬峯の温泉に流を
所れしれつら予友牛涎子と
今り代用しれく交りの所やまは
其数もたれおるなり 枕を亡文據我翁
の遺言も予の心を集むるに

此翁の風流を三つて今更よゆ
予も其筆に如るを以てしをれも
人を知るにこれも類し舟遊子の未極
を以てして神に一人を寄りてをる

在り 世の時を去るる智法の縁 白雲堂 治川

堪羽翁の遺言を以て予も好道
を以て其修りて終焉に在る矣
此翁の如く下りては予人の志は
たゞ此一人を志すべし

予も情思もなきや昔よりあかぬ 高橋

幻り 一人もくして 晴るの雲

揮毫場

雲油

志すく梅の影人あは流 東流とん
を以て其修りて終焉に在る矣
此翁の如く下りては予人の志は
たゞ此一人を志すべし

陰鳥舎

空鶴也 左路より 中島の玉川ハ 春改

青杉洞

撫子ハハ佛一の國へ 中島人あは 松操

落風館

くくやうぬ 中島の道のみ 杜喬

流中島の長や 年のちを記せん 雅鶴

養の

養の

城のゆき

肥後半土

そふゆくゆき城のゆき一竿の蛇一竿人乙語

210
ゆきからゆきゆきゆきのゆきゆきゆき 百申

消やしたるゆきゆきゆきのゆきゆきゆき 吾良

紙子ゆきゆきゆきゆきゆきのゆきゆきゆき 音素

水仙の浪のゆきゆきゆきゆきゆき 和舟

雪のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき 一葉

風翁と予々文久ゆきゆきゆきゆきゆき
のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
光陰をゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
をゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきの八月小踏ゆきゆきゆきゆきゆき
同いゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
東のゆきゆきゆき

養の

養の

年おひ又流うらぬ名舞か 文選

書志とやま一揃くハ筆 亀世

知りし此村り増補の指しせ 才徳

車如りり 忘り系り 正波

松と新月一帯に旅の色 莠燕

220 魚のみみらも酔さあのか 執筆

卒突忌

も程のあふひや花の梅大佛 亀世

夏のとまゑに徳のこゝろ 銀清

八十崎も御心ひかり音信く 和信

弓張月の弦あがりあり 鈴波

神垣の蔭やさうき出あらん 和深

青きたよりけよ汲若拙抄 白足

ウ 勝平焼のあまなる也 盛盛 錦盛

内子一音せく 吾の白妙 文選

意まてふあをわす 経の蘇をり 冬輔

230 振をこけすも 志存く 才徳

夜もい川すく 夢をともすも 銀海

風のをさるり 志のく川さあ 龜世

名月半あけを 馳せる夢の思 白之

戸さくく 吟と 民の初白 和信

あれも 世や 時を 小春の 投非 遠使 鈴波

是斗のくハ 家も 和信

花の早さ 三つさう けり 一言 侯 才徳

西霽 三川く 都を 下り 錦盛

三 藤相さハ 書花 鳴り 不審 紙 初信

240 腐芳 しく 鳴く 冬 輔

停年 色 傾 城 町 乃 初 圭 綱盛

白粉 うの 冨 古の 和 信

細きと借ぬいられそ方の巻を 和陶

万葉の道平一入おのこ 白之

松月の沙千苔むはる地鉄 文運

唯む時物をとくまる冬に 冬轉

むし中ふ葉とらば玉かけ 萬世

机阿ふひそ夢よ八く 鈴波

新月や又十三次伊達御衣 鈴波

250 轉衣の借りふ葉初より 才徳

ウ 松う枝をりれくみやけふ飛阿道 鈴波

熊坂をんや出より煤掃 和陶

さうらの贈をあたはる波の流 白之

万白の鞠り満るまに昼 萬世

ちより掛まけりふ葉の花さく 鈴波

このあしある木の葉の芽 秋葉

予の茅屋を亡父家居の一角に
殺らるる信申と云はるるは是故
をが原と云はるるは因て其徳
紙と云ふ之故なり其の如く
あはれに折るる神と爲すは

花咲くはくく梅のあはれは 鍋盛

仁の阿母のれはくは 和陶

海原のちんちんの漱入は 和信

陽子のめきはは 鈴波

名有り一淫院のいふ琵琶一抱 冬輔

みくらぬまの蒲萄はくは 辰橋

深し月の持いあはれ 立田 白久

赤くは赤くは 文運

さき花の梅と知るるは 和陶

雛のふきは 綱登

阿る梅と知るるは 鈴波

志願りも 和信

酸痛 和信

葉のつら枝をたぐさぬうたきり 銀清

飛石煙く月を吹窓 白之

雛の蚊の掃く介と蟹洞一 文逗

江戸の教習をよめうけぬ 名輔

多利等の苑の濠及遊童子 和陶

風巾子さうなりの尻餅 鈴波

三
かけ落ふとまゝなまふくれさうり 名輔

神より掃蕪又もよし原 和信

高やあんにねり情の月裏友 鈴波

青葉のこしく永糸の結 瑞盛

文房方定と古舟の蓋あし 銀清

道の絶あしと被志月也 鈴波

し平茶のつえ鶴紙とれのか云 和信

木の下園のよとらる武志 小逗

十あつてりかた浮世の宗有也 編登

二五もよりね入おのう 和陶

年よけのあけの月の忌 松波

小春の珍と急のたけ 冬轉

ウ 寄道ある舞妓をまきのほろびく 白三

今朝のさうし揚蒸布の色 鍋釜

踏豆とすくとよき海ぬ靴川 紹清

290 日癖やけりり晴くけりや云 ぶと

ちりりゆりきりきり茶書の法 文選

はらけ海つれ山の身白 執筆

鹿陽の海つれ山の身白 吉名雄羽

恙又寂思老人知是より四十年と森の池

友あり去るを去る月去る病床の吟

雪をまじりて足跡をたぐひるの縁とる

を跡 翌十をせとてあくちとて

しりしり同性を世より計こしとせ

しりしりあやうきあやうき 翌朝順宗風和

居士の静世をたぐひるの縁とるの縁とる

そらやむくは解る水西境 安令齋 柳舟

吟海の境羽居士其風物の好あ
作意絶よ三回方母名せりし其晨
月夕花をのほとけり風乃乃意を
め實と集め真意と作し詩を連
絶と云しと播神名跡一に到るは
光をよとせし世をよふと一に持し
たるの教を所傳の書わく名のこし
と為るは神の跡もあひあはせ樂
う海と故人の文に深くせし作
云の事もわたりうのみ跡をて
靈ありて投は

湖南

音き——天の香久山をの果

晴七亭
角上

昔く吟海居古人襟羽の
ゆきと下しつゝ先祖を
の月を詠免て来とを
きこの神音を葉らひ
深きしり五のれ松
絶をよしとあ
絶つゝは

寂照乃及帯に雪くく母を
以蕉翁の性まふふあな
誑諛裏造一予七亦中
ありはぬと睦く蝶羽并
見られ一周く蝶の舞
るる下免ふは若物語
耳高はくは父の境は
ゆるりゆるり

下をきりては
お縁に昔と語り
席五十年のあな
放たさきりては
も物探るるは
ゆりのくま物
けし心物と

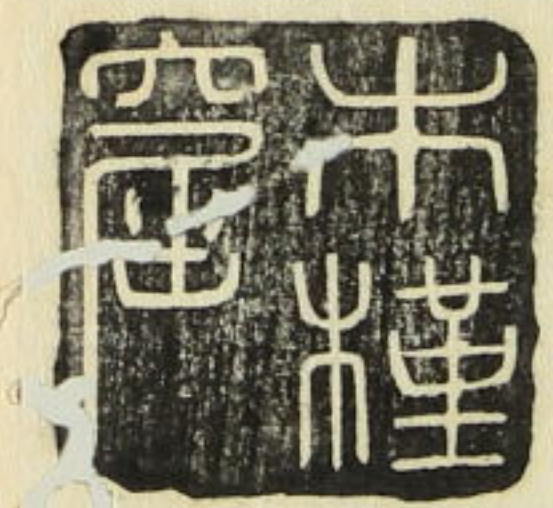
心おののまゝに書かす月とて

不月とて書かす月とて 國のたゞり哉

筆世のめし給ふ

攝府

中河菴



習、軒蝶羽居士行案

并贊

居士諱季雄字太次郎。別號習軒蝶羽。姓下郷。尾之鳴海人也。其先出自伊勢。後裔知足為之子也。氣宇豪俊。姿貌稜角。博覽典墳。高遠恢廓。殊有大志。每見高山廣澤。輒規度。指畫營業處所。徧給育

廢人窮勞。是匪所覃。藝倫而植子
蘭孫。星列雲布。千指從者。慶集蟠
群。况乎。通雪月之道。深慕滑磬之
古。而俳學尤精所也。曾壯年比。親
負素堂翁。而勤繼晷之力。孔切也。
父知。豈為者。遊於難波宗。因之。
雖事於檀林。之俳吟。後邂逅於芭

蕉翁。華身正風體哉。因而。為子者
隨父之道。則益窮其道。及書法亦
得悉。故蕉翁之書。取。句。取。幾計為
石渠之秘。寂如俳句。則著身居士
之。千鳥掛素哉。於茲。奧羽。臨。西。墨
客。萃。雄。武。凌。騷。人。靡。不。為。余。千。里
之。駕。掛。一。榻。於。壁。之。交。因。而。其。聲

籍甚。世有朝。辱拜趨於
有鄰。軒藤公之偕。保而捧呈於木
挑之野。辭則賜以瓊瑤之尊。韻誠
一世榮名。千代嘉聲。誰比焉哉。至
若一窟神道。而倚吉田之家。略敵
禪園。而慕龐老之跡。則實可緬焉
士歎。嗚乎。天奪斯人哉。往辛酉之

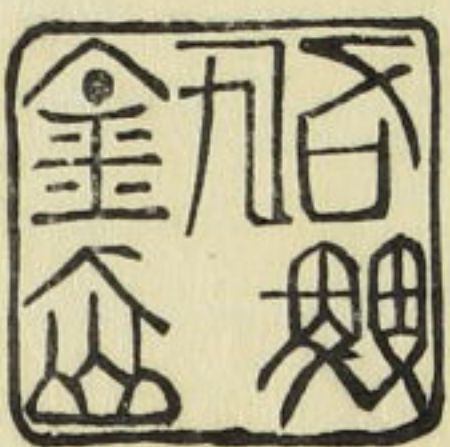
冬。十一月中二奠。羅微恙。而吐一
旬。泊於細根山上。登僊去。春秋年
十五。遐邇嗟嘆。而或馳喪。或聞訃
音。無不痛腸。其素哀詞也。不可枚
舉。孝子龜世。俾余誌于居士。行實
之二。其贊曰。
嗚乎。斯老。智仁完全。鳴海浪涌。不

蟄深淵。細根雲密。不露地巔。

維時寬保二年歲次壬戌春正月

東尾鳴海扇川橋畔枕流

養獨曠布衲誌



京寺町二条上九町

井筒屋

庄兵衛
中兵衛板

